

シャンフロとか

ふゆみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作にシャンフロとかあったので置いときます。

結構前のなので設定違いや捏造設定ゆるして！ なんでもしまかせ！

目次

脱獄	1
浄鍵	7
リベンジャーズ／アンリミテッド・ウォー	12

脱獄

そのコーヒー・スタンドは、無人だった。のそり、と、優に2メートルは越えているだろう漆黒の鎧がスタンドに入り込んでいく。

出てきた鎧は、なみなみとコーヒーの注がれたプラスチックのカップを手にしていった。Lサイズのカップが、まるでコーヒー・フレッシュのポジションのように儚く見える。

鎧は、備え付けられているテーブルにどっかりと腰を下ろし、スタンドのある広場を睥睨した。

広場も、すっかりと無人だった。このケイオース・シティの住人達は、2ブロックほど向こうのドームスタジアムに避難しているのだから。

摩天楼を隔てた遠くから、火災らしき煙とサイレンの音が響いている。まあ、大した事ではない。ちよつと警官隊の白バイが燃えて、応援のパトカーと消防が集まっているだけだ。

「……ち。」また「か」

遠い喧騒の中に、子供の泣き声が混じる。

広場の中心に立っている樹木の根元に、まだ少女と言って差し支えない年頃の女の子が一人へたりこんでいた。

「妙な因縁が出来ちまったな」

コーヒーカップを置き、再びスタンドに潜り込む。二倍の時間をかけて出てきた鎧の手には、特大コーンに栗きんとん味のアイスが三段重ねされていた。

「おい、ガキンちよ」

「ふええ……？」

「ここは危ねえぞ。これ食ってさっさと逃げな。ママはたぶんあつちだ」

巨大な手から小さな手へアイスが渡され、巨大な手は避難場所のドームの方を指差した。

「アイス、同じのぼつか……」

「この状況で言う事がそれか。大物になるぜお前。ほれ、さつさと行け」

「うん……おじちゃん、ありがとう」

涙を引つ込めた少女は、指示された方へ駆け出していく。

その背中を見送りながら、コーヒーを再び手に取った鎧男——白バイ隊を襲撃し、街に混乱を及ぼしている元凶の怪人ヴィラン「カースド・プリズン」は、シテイの広場を貸し切った優雅なコーヒー・ブレイクを再開した。

「カースド・プリズン」……その名称は、“彼”本来の名ではない。この漆黒の鎧は、“呪われた牢獄”の名の通りの拘束具であり、彼を縛り付ける枷だった。

「ふん」

手の中のプラスチックカップを兜の口元に当て、流し込む。生クリームとコーヒーの乱暴なマリァージュ。悪くはない。

この鎧は、着ているわけではない。鎧そのものが今の彼の体なのだ。

”染み込んでいる”、というのが近い表現だろうか。鎧というよりも、魂を封印されたゴーレムのようなもの、というのが適切かもしれない。

重く分厚い鎧の枷は、自在に天駆ける本来の彼にとっては、一時すら耐えかねる重圧だった。だから、それを取り戻す事以外の、この世の全ての悲喜交々など、彼にとっては些事に過ぎなかった。

だが。

「ふん」

飲み終わったカップをぶん、と適当な手つきで放り投げる。それはスタンドの横にあるゴミ箱の真ん中に、寸分変わらず吸い込まれていた。

ここでは、このふぎけた街では、それが”ゆるい”。

あのクソ野郎の力が届きにくいせいなのか、鎧そのものの窮屈さ

が、いつもほどではない。少し気合を入れれば、ほんの少しの間だけだが、この忌々しい鎧を脱ぐ事すら出来る。

倒すべき奴もここにいる。積極的に離れる理由はなかった。泥水を楽しむ余裕すら出来た。

「……………」

広場を眺めていた鎧が、ふと無造作に右手を上げたかと思うと。

「——アアッ！」

「……………」

がぎいんと、鈍い音。

「どうした。ご自慢の必殺技じゃねえとは、舐めてんのか、ヒーロー」
「……………」

鎧の腕に遥か上空からの蹴りを加え、その反動でくるんと空中で一回転した蒼い影が、コツ、と広場の石の床に降り立つ。

ミーティアス。夜を切り裂く流星の名を与えられたその蒼いヒーローは、ヴィランの口上に何の反応も示さず、鋭い視線だけを向けている。

「本気を出せ」

「ふん、また”それ”かア？ 都会に来て悪い遊びを覚えちゃったか？ 俺様なんかと遊んでると、こわーいこわーい親父様に怒られんぜ？」

「ギャラクセウス様は、関係ない……………」

ぎり、と、拳が握られ、歯を軋らせる。それは、悪しきを挫く正義の発露ではなく、仇敵を相手にした闘争心の表れであった。

「【カースド・プリズン】じゃない……………」お前”に勝たなければ、意味がないっ！」

「呵々。スカしてたヒーロー様が、いいツラになってきたじゃねえか。なら、リクエストにお応えしてやろうかねエ！」

プリズン・ブレイク
脱獄！

弾けとんだ鎧の中からは、目の前のヒーローを全て反転させたような、緋色の男の姿が現れる。

「僕はお前を、越える！」

「遊んでやるよ。来な、シヤバ僧！」

蒼き流星と緋い彗星。異邦の街でぶつかり合うのは幾度目か……

！

— n o t e —

もちろん、この短編は、ある一つの映像によってもたらされた閃きだ。

先日のグローバル・ゲーム・コンペティションでのGH：Cエキシビジョン・マッチは、あまりに強い衝撃を各方面に与えた事だろうと思う。僕もその一人だった、というわけだ。

ミーティアス、というキャラクターは、つまりは作られた優等生なんだ。ヒーローとしての力も使命もね。その中で彼自身が突き詰め

ていくテーマとなると、やはり「オリジナル越え」という事になる。ギヤラクシア・ヒーローズシリーズにおけるカースド・プリズンは、残念ながらそのテーマに沿っているとは言い難いところもあったけれど、GH・Cという新たな世代のゲーム、そして偉大なるプレイヤー達によるあのマッチは、そのテーマが行き着く先という、僕もまだあやふやに考えている程度の核心部分に重大なインスピレーションを残してくれた。

つまりは、与えられた使命という歩みを、求めていくテーマという疾走が抜いてしまった場合はどうなるのか、ってね。

カースド・プリズンは、例えばクロックファイアのような（例えてこのキャラが出てしまう時点で、どれだけ僕があんなマッチに影響されているかがわかると思う。あの『名前隠し』^{ノーマム}氏のプレイは本物だった。今度の「リベンジャーズ」の新作映画に彼女がクロックファイア役で出てきたとしても僕は驚かないね）、明らかな邪悪じゃあない。自らの欲求に忠実なヴィランである事は疑うべくもないけれど、そこに他者を甦るような悪徳がない事は、僕の作品の読者ならばわかっていただけている事と思う。

ギヤラクセウスも扱いかねるイレギュラー……地球を正反対に進んでも一周回れば同じ場所に辿り着くように、ある意味で彼は全存在と同一でもある。

だから、彼が不思議な因縁のあった少女を気まぐれで守るという事も（ギヤラクセウスがいらん事をしてトラブルが起こると同じ確率ぐらいには！）、きつとあるんだ。

そして、ミーティアスが、人々を守るといふ使命よりも、自分は”言う事を聞きやすいよう Downing Lead された彼なのだ”というコンプレックスに飲み込まれ、オリジナルを打ち倒すという自らの欲求の方を優先してしまう事も、また。

戦いに夢中になったミーティアスの必殺技に巻き込まれた少女の盾となるプリズンブレイカー！ あのシーンを見た時の僕の衝撃ときたら！ 心臓を掴みあげられて、これをコミックにするまで寝る事は許さないと神に脅されたような気分だったよ！

今回の見開きにも描いたそれは、描き上げた僕自身も震えるほどのエモーショナルな光景だった。この「入れ替わり」によって、彼らの魅力がさらに掘り下げられたと確信できたんだ。

最強のプロゲーマーと、最高の傭兵に、彼らの産みの親から最大の感謝を込めて。

浄鍵

夜を彩る摩天楼の光彩は、彼女にとって懐かしさと違和感を同時に想起させる。

この夢幻のような都市の最も高い場所——ケイオースタワーのてっぺんから見下ろす夜景は、見覚えがあると同時に見覚えの無い、不思議な感慨を覚えるものだった。

「スタジアムはタワーの東側だったんですけどねえ。まあ、地下鉄まで再現してたら、”ブロックごとのシャッフルが煩雑極まるだろう”し、仕方ないのか」

どん、どどん。

少女の眩きは、遠くのビルの陰から響き渡る、都会には相応しからぬ爆発の音に紛れて消えていく。

まあ、”この街ではいつもの事”だ。

「ああいや、ヒーローとしては、地下に埋まる人がいなくていい、と思わなきゃ。あはは」

タワーを彩るいくつもの回転灯の光が、剥き出しの支柱の縁に腰掛けている少女を照らし出す。

そこは地上から666メートルの天空。少女の足元は何の遮るものもない宙空であり、眼下に広がる風景は、高所恐怖症ならずとも震え上がるような縮尺だった。

「今度は”おじさま”かな？ ふふ。そうだといいな」

が、少女はまったく構うことなく、その小さな足がギリギリ載るかどうかという支柱の上にひよいと立ち上がる。

Japanの女学生が着るユニフォーム……セーラーではなくブレザースタイルをもう少し薄手にして体に貼り付けたようなヒラヒラとした格好だが、その極端に丈の短いプリーツスカートは、どれほど風に煽られようとその使命を全うし、中身を見せる事はなかった。

「さ、お仕事お仕事、と。レスキューヒーロー『ロックピッカー』、故郷に錦を飾りましょうか。もう何回目かは覚えてないですけど」

緑色に光る手を何も無い目前の空間にかざし、トン、と軽い足取りで地上600メートルの空中に躍り出た少女は、『そこに開いていた扉に滑り込んで』忽然とその場から姿を消し——次の瞬間には、攻撃態勢に移っていた。

「そいつ。飛び蹴りっ」

「ぬっ!」

”突然空中から現れた少女”の蹴りを太い腕でブロックし、そこかしこにランドリーの全自動洗濯だけでは取りきれないシミの残った白衣が翻る。

「うーん、ヤブ医者のおじさんですか。ハズレー」

「く、鍵開けの嬢ちゃんか! ちょうどいい、手伝ってくれ!」

「はいはい。救助ですかー……」

少女の蹴りを受け止めたのは、手に携帯電話を持った、くたびれた白衣の男——Dr. サンドルフオンという”同僚”だ。彼女の知るものより少し若返ってはいるが、多少の時空の歪みなんて、ギャラクセウスあのろくでなしに故郷関わっていけば日常茶飯事だった。

ましてや、この故郷ケイオースコピシティでは。

そう、巡りあうはずのなかった誰かと、再会する事も。

「……」

このヤブ医者は、まだしも善人である。自ら爆発を起こす事はするまい。

ならば、爆発を起こした者は別にいる。

「おい、嬢ちゃん?」

「あー。ごめんなさい、ドクター」

横の道路で炎上していたバイクだか車だかが、一際激しく爆発する。その炎の暗幕の奥に揺らめくのは——かつて見た、大きな大きな黒鉄の背中。

「私は、”鍵”を”開け”てあげなきゃ」

おい!? とうろたえる闇医者の声を無視して、少女は無造作に爆発に近寄っていく。

ぶおん、と炎のカーテンの中から振り抜かれた鉄の腕を、なかった

かのように通り抜けながら。

「お久しぶりです、”おじさま”。とりあえずお近付きのしるしです。どうぞ」

かざされた緑色の手——”浄めの鍵”が、炎の中から現れた漆黒の鎧——”呪われた牢獄”に触れて……。

——とある攻略記事より——

変則的なトライアングル・トリニティが先の実装で、ベーシックなタッグマッチが今回のアップデート、というのを不思議に思ったゲーマーも多い事だろう。

それもなるほど、新実装のキャラクターとの調整に手間取っていたのか、と納得するものだった。しかも、GH・C初の”有料DLCキャラクター”だ。

しかし……うん、攻略記事としてあるまじき事ではあるのだが、このキャラクターについては、語る事自体が野暮のように思えてしまうのだ。なので、多くは語らず、注意点に終始しておこうと思う。

まず一つ。今回の新キャラクターは、原作のギヤラクシアン・コミックには欠片も存在しない、ゲームオリジナルキャラクターだ。

二つ。有料コンテンツではあるが、他のキャラクターより性能がいい、というわけではない。いや、はつきりと弱いと言える。最大限好意的な評価を下したとして、テクニカルで扱いづらい、という表現に落ち着くだろう。敵やNPCとしては出現するので、課金衣装のようなものであると考えてほしい。

三つ。このキャラクターが実装された経緯を察する事が出来る熱心なユーザーならともかく、とりあえずDLCは全部揃えておく、などでこのキャラを触る方々は、まずこの動画を見てほしい。

https://ncode.syosetu.com/n6169dz/177/

以上である。

なお、全く関係のない話ではあるが、筆者も所属するクラン『栗きんとんちゃん尊い同盟』は随時隊員を募集中である。

・GH：Cオリジナルキャラクター『ロックピツカー』
ブロンドの髪をなびかせたティーン少女。

手をかざすだけでありとあらゆる鍵を開ける能力、『浄鍵』を持つ。その力は、レトロ極まる南京錠から最新技術の電子錠まで苦もなく開き、果ては錠前などない完全に密閉された空間に『鍵を開けて』通り道を作ったり、地球全土を脱出不可能な密室と捉え、『鍵を開けて』外に出た後、『外からまた』鍵を開けて『自在な場所に入り込む事で転移する、なんてことすら可能とする。』

なんとなれば稀代の大怪盗ヴィランともなれたであろうその能力の持ち主はしかし、人々を守るヒーローとなった。その能力は、災害で脱出困難となった人々を救出する事などに活かされている。

それは彼女の原風景。『牢獄』を背負いながら、幼い自分を守ってくれた『おじさま』への憧れ。

好きなものは栗きんとん味のアイスクリーム。嫌いなものはクマ

のぬいぐるみと流れ星。

——其は呪われた牢獄すら解き放つ浄めの鍵。

リベンジジャーズ／アンリミテッド・ウオー

『リベンジジャーズ、全滅。』

映画史上最大の衝撃作！

ギャラクシア・レーベルが贈る全世界NO.1シリーズの最新作が
ついに始動！

- ” ライト・キューブ ”
- ” ダーク・キューブ ”
- ” ニュートラル・キューブ ”
- ” ロウ・キューブ ”
- ” ケイオース・キューブ ”
- ” ネイチャー・キューブ ”

【アンリミテッド・キューブ】と呼ばれる6つの秘宝を手にした者は、
不可能などない無限のパワーを手に入れると言われる――。

§

「この設定ケイオース・キューブからでつち上げただろ……」

「映画は静かに見ようよサンラク君」

「リアル映画館ならともかく、VR上映ならツツコミまくりながら見るもんだろ。こないだ見た『シャーコブラ』とか3分ごとにツツコまないと発狂しそうだったぞ」

「なにサンラクお前クソゲーだけじゃなくてクソ映画も主食なの？」

「よくわからん罰ゲームで見せられたんだよ……くっそまたムカついてきた雑ピめ明日は英語ポエム朗読の刑だ……」

「わたしC級サメ映画はちよつと……絶対見ないだろうから参考までに聞くけどどんな映画？」

「エジプトっぽいヘビのエラの広がっているとところがサメになって毒牙で噛みついてきたかと思つたら、最後には戦闘ヘリと合体しだす映画」

「コブラでダブルミーニングにしたつもり!?」

「……ほんの少しだけ怖いもの見たさで見たいかもしれない……5分でギブアップしそうだけど」

§

「くうっ……!」

「何というパワーだ……!」

【ゴールドエッジ】、【シルバージャンパー】、【ミーティアス】……。

全能存在ギャラクセウスの元に正義を体現したヒーロー達が、圧倒的な力の前に倒れ伏す。

「■■■■■■■■■■」
「!!!!」

ゴリラを三回りほど肥大化させて、ところどころを蛍光色に発光させ、肩や頭頂部を禍々しくいからせたようなエイリアンは、口を大きく……その頭よりも大きく開いて、深海魚のようなねじくれて鋭く尖った牙が並ぶ口腔内をむき出しにすると、字では到底表せない、空間そのものを揺らすような、ただただ原始的な咆哮を発した。

【ゼノセルグス】……あの災害が地球に流れ着くとは……!」

「とにかく都市部から離さなければ! 仕留めきろうとすれば、こちらの攻撃でも被害が出てしまうぞ!」

「だがどうする? アレを運べるようなパワーはこちらには……」

「お任せでござわすうう!!」
「?!?!」

まっすぐ体を伸ばした小太りの人間の体が重力を無視して地面と平行に直進し、『ゼノセルグス』の脇腹に真横に突き刺さったたらを踏ませた後、くるくると三回転してぴたりと着地を決めた。

「フーン！ 見たか『ハイパー百貫頭突き』！」

「リキシオン！ 君か！」

力士にして忍者にして錬金術師……存在自体がバグのようなヒーロー【リキシオン・コーガ・パラケルスス】が、ドウルンと腹の肉を叩いて揺らし、塩を撒いた。

「各々がた！ 我が『サイバー漢方』パワーをフルドライブさせて彼奴を街の外まで押し出し申す！ 全てのエネルギーを使い果たします故、とどめをお頼みますぞ！」

リキシオンが90度真上まで上げた足をドンと振り下ろして四股を踏むと、その筋肉と脂肪で限界まで膨れ上がった肉体が黄金に輝き始め、1秒間に16連打の突っ張りを開始した！

「どすこおおおおい!!」

「■■■■■■■■■■———!!??」

その圧倒的パワーの回転に、ゼノセルグスの巨体はなすすべなく突き出されていく！

「よしー…こまで来れば！ はああああ!! 『ミーティア・ストライク』!!」

「『ゴルディオーン・ヘッジホッグ』!!」

「『シルバー・キック』!!」

そうして街の郊外まで押し出された【ゼノセルグス】に、ヒーロー達の超必殺技が炸裂し、宇宙ゴリラは大爆発の中に消えた。

「何とかなかったか……って、リキシオン何してるんだ……?」

「エネルギーチャージの為のコズミックちゃんこ鍋を作っておりもうす。皆も食べなざるか?」

「……いたどころかな」

「うまいんだよなこのジャパニーズ・ポトフ」

一つの戦いを終えたヒーロー達に、休息の時間が訪れる……。

§

「よくこんなシュールな絵面にOK通ったな……」

「緊迫感のあるシーンが多いから、こういうのも必要なだつてさ」

「アメコミ、リキシオンなら何でも許されるって思ってるところあるよね」

「野良でリキシオンに当たると、マジで笑わせてくるのを戦法に組み込んでくる奴がいるからな……いきなり『大相撲スターシリーズ』とかフリップ持っててリアル相撲取りの細かすぎるモノマネ始めたやつは芸人極振りだったか」

「なにそれ超見たいんだけど」

§

「なに!? 『ケイオース・キューブ』が奪われたじゃと!?!」

「そーだよー! 『妖精郷』に安置されてた『ネイチャー・キューブ』も奪われちゃったの! それを追っかけてたら、ちようどそっちが襲われるところも見ちゃったのよー!」

腰に二本の刀を差した袴姿の老人に、手のひらサイズの妖精がくるくると複雑に回転しながらまとわりつく。

「狙いは『アンリミテッド・キューブ』か……『ケイオース・キューブ』を管理していた『シルバージャンパー』に連絡をつけねばならんの」
「実行犯は消されちゃったみたい! ヒトの消し炭だけが残ってて残滓が途切れちゃって追っかけられないんだよー! ランゾービー

ちゃん助けてー！」

「……見た目は夢の国なのに意外とエゲツないの、お主」

現代に生きるサムライ『乱蔵』は、三回転半しながら己の全身を飛び回る妖精『ティンクル・ピクシー』の少し人間から外れた倫理観に一筋汗を垂らした。

§

「ティンクル・ピクシーめっちゃヌルヌル動くな……」

「この部分のCGにもユートピア社の技術が入っていると何か何とか……」

「ガチじゃん。どんだけ羽虫好きが幅利かせてんの」

「シリーズ通して造形に力入ってたからねえ……伝統なんでしょ」

「あんな中にワイヤー入ってそうな鋭角の魔女っ子スカートでくるっくる回転してて中身が全く見えないのも芸術点高いわ」

「お米の国だからかその辺厳しいよな……『ロックピッカー』のミニスカブレザーも、ゲームでは絶対見えないし」

「おやおやお？ サンラクくんもそういうのキョーミあるんだあ？ なに？ 地面に張り付いて嘗め回すように見たりしたの？」

「どこぞのシモネタニア帝国みたいな事言ってるじゃねえよ……通常技を上空レポートからの飛び蹴りにした運営に言え！」

§

「クソテレビ！ てめえか！」

「落ち着きなさいな、ヤブ医者さま へへ）――旦々」

その女性の、そっくりそのまま機械のモニターと化している顔の部

分に、電光掲示板よろしく大きく顔文字が表示された。

「わたくしも、さすがに地球が爆発してしまつては困りますもの(？へ?)」

「黒幕の見当がついてるつてえのか？」

「ええ、もちろん(* 艸、) この地球上でわたくしに見れないところなどございせんわ(艸、 *)」

「もつたいつけねえでさっさと見え！ ウゼエ新機能つけやがって！」

「あん。相変わらずせつかちなヤブだこと(3、)」

顔モニターに次々に切り替わる顔文字を表示させながら、狂人【M.S. プレイ・ディスプレイ】はくねくねとしなを作りながら、宿敵たるくたびれた白衣を翻す闇医者【Dr. サンドルフオン】に向かつて合成音声を響かせた。

【爆弾魔】と【商人】^{トレーダー}ですわ(へー、)」

§

「……なあペンシルゴン、あれ……」

「ああ、JGEの時のキミの怪人面白フェイスちよつと面白かったから演出に進言してみた」

「お前……お前……！」

「いいじゃん別に。公には何にも擦ってないんだしき。別にレイちやんと仲良く並んでラーメン啜ってる隠し撮り画像を拡散したわけじゃあるまいし」

「おいこの場に関係ない人質を先出しするのはやめろマジで」

「えっなにこのクソゲー脳にもそういう情緒あつたの？ ちよつとその辺詳しく」

「お前が言うなこの総受け野郎」

「なにその息ぴったりのユニゾン!？」

§

「おじさまっ。」

「フン。このユニバーズは俺の舞台。この空は俺のものだ。真つ暗なワンルームで目覚まし時計分解して^{バラ}るギークなんぞの好きにさせるのは気に食わんな」

「はい。じゃあ行きましょ、おじさま」

ギヤラクセウス直々に力を封じた【呪われた監獄】に付き従うのは、ギヤラクセウスの力及ばぬ混沌存在カオスに取り込まれたケイオーステイという『密室』から、『鍵を開けて』逃れた少女。

未曾有の危機に、可能性ゼロを覆すイレギュラー達が立ち上がる。

§

「擦ってくるじゃん」

「GH・Cの売り上げが青天井で伸びてて、アメコミ界限激震らしいからね」

「海外だとシャンフロ出来ないから、GH・Cがポストシャンフロみたいになってるって聞いたけど」

「そうそう、もう海外勢はGH・C一色だよ。『名前隠し』を意地でも探し出したのも、『カースド・プリズン』の色がほのかにカボチャ色なもの、『ロックピッカー』の参戦も、大体その忖度らしいし」

「シャンフロおま国問題まだ燃えてんのか……」

「BB&pid動画で再炎上させた有名配信者様がぬかしおる」

「あの動画の後、海外から日本に移住してくる人が一割増しになったらしいよ」

「ビューウ！ 日本の救世主様ア！」
「くつそマジでアレ保存してミラーしやがった奴誰だ絶対許さねえ……！」

§

「クフフ。これが『ケイオース・キューブ』……かの【カオス】の領域、『ケイオースシテイ』に存在すると言われた『アンリミテッド・キューブ』ですか」
「ああ。高くついたよ。ウチの優秀なエージェントを何人が使い潰してしまった」

空間投影モニターを通して語り合っているのは、二人の男女。

映画からそのまま飛び出してきたような古めかしい燕尾服をさらりと着こなしている長身の女性と、シワ一つない最高級のオーダースーツに身を包み顔に自信を漲らせている髭面の男。

「いやあ、よく持ち出せましたねえ。かの【シルバージャンパー】が持ち帰っていたのでしょうか？」

「ヒーロー様は金に屈さずとも、保管している施設の職員はそうではない、という事だ」

「それはそれは。ずいぶんと骨を折ったでしょう。その労にはしっかりと報いねばなりませんねえ」

「っ!?!」

どん、どどん、と、空中投影モニターを通して、男の側に断続的な爆発音が響く。

「な、なんだ!?! 何が起こった!?!」

「クフフフ。今までありがとう、武器商人くん。代金はすでに届けてありますので」

「きつ、貴様アッ！ クロックフファイアアアアア!!」

「なに、お釣りはありません。どうぞ遠慮なさらずすべて持っていつ

てください」

男装の麗人「クロックファイア」がパチン、と指を鳴らすと、空中投影モニターの先でボン！と炎の華が咲き、髭の男の焼け焦げた四肢が爆発四散した様子を写していたモニターが掻き消える。

大陸における紛争の8割を牛耳り、彼に手に入らない兵器はないと謳われた死の商人「ショーウインドウ」の、あっけない最期だった。

「くくっ……い……はははっ……!! あーっはっはっはっはっは!!」

呵呵大笑。麗人の左の眼に埋め込まれている翠の宝石が妖しく光る。

「さあこれよりは、このクロックファイア、最期にして最大のショーにてございます。静謐なるこの宇宙に、我が最高傑作を美事打ち上げてみせましょう」

爆弾魔は嗤う。ただただ自らの浪漫を夢見て。

「それでは『地球爆弾計画』の幕を開きましょう。地球にお住まいの皆様におかれましては、どうぞそのまま特等席で最期までご覧くださいませ」

手の中で弄んでいる6つの「アンリミテッド・キューブ」の力で、地球を爆弾にして宇宙を爆発させるために。

——T o b e ” R e v e n g e r s : F i n a l g a m e

§

「いやあー？ 最初にメールが来たときは悪戯だと思ってたんだけどねえー？ 監督自ら極秘来日して対面でスカウトされたらさすがの私もねえー？ 考えないでもなかったっていうかあー？ はー超新

星ハリウッド・スター『名前隠し』^{ノーネーム}様に酒の一つも注げない男どもはこれだからあー」

「なあカツツオ、あの「クロックファイア」、全部本人のアドリブってマジ？」

「さすがにデマだつてさ。実際は『ハイドロハンズ』の原作者がコレに合わせて脚本当て書きしたのをさらに全部直させたとか……」

「デマの万倍非道いじゃねえか畜生かよ」

「原作者もノリノリだったらしいよ。『やっぱリアルは違う！』とか叫んだらしい」

「ネジぶっ飛んだヴィランで有名な原作にリアルヴィラン度で感心されるとかさすが超新星○ですなあ」

「君たち素直に祝福できないのかなあ!?!」

「ちなみに『顔隠し』^{ノーフェイス}の連絡先結構しつこく聞かれたから、次回作にキミも呼ばれるかもね。やったぜハリウッドデビューだ！」

「えっ」

「鎧の中の人だから顔も出ないし万々歳じゃん。おめでとサンラク」

「……………嘘でしょ?」